



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
http://www.kokubunken.or.jp/
E-mail: info@kokubunken.or.jp
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

秋からの読書会を前に思ふこと

—今こそ国文研の価値が認識されるべきと感じてゐる—

武澤陽介

近代フランスの作曲家クロード・ドビュッシーの有名な「月の光」には、作品の後半に冒頭部分が同じ形で再現され全く同じ旋律が奏されるが、その中に突如これまでに存在しなかった「変ハ音」が一音だけ響く。有名な音楽家で、我が国の音楽教育に計り知れない功績を残したアンリ エット・ピュイグロロジェ女史は、この不思議な一つの音符に対し、「(完璧な芸術に対して)思わず溢れた一滴の涙」であると嘆じた。私は、感受性を強く揺さぶる真の感動とはこのやうな欠片にこそあると実感してをり、教壇に立つ時、教育者として後進の心にこの様な小さな光を与へたいと常に願ひ、日々精一杯努めてゐる。

私はこの感動の光を、学生の時に初めて参加した平成十七年の伊勢で

の合宿教室で体験した。当時、大学で音楽を学び、自己の芸術の在り方に跪き苦しんでゐた私に、父が参加を勧めてくれたのが切っ掛けであった。最初は何も分らずに参加した合宿であったが、講師の方々の講義や多くの友人との語りひ、さらには旅の道程までもが掛け替へのない思ひ出となつて、今もその一つ一つが鮮やかに蘇つて来る。あの時の合宿での感動の欠片を綴つたノートは今も常に座右に有り、今も創作や仕事に迷つた時、一筋の道標を私に示し続けてくれてゐる。

伊勢合宿の後、暫く国文研との縁は遠退いてしまつてゐたが、去年の秋、国文研東京事務所(渋谷)での古事記の輪読会へのお誘ひを頂いたことを機に、正式に「正会員」として入会した。それ以来、時間の許す範

囲で輪読会などに参加し、新たな学びを続けてゐる。今年夏の厚木での合宿教室では、指揮班として廣木寧運営委員長の下、合宿を運営側の立場から体験するといふ貴重な経験を待た。

また、九月二十三日(月・祝)、私は東京大神宮にて執り行はれた慰霊祭に参列した。都会の喧噪とは別世界の厳肅な斎場に入り、まづ最初に目を引いたのは祭壇の両脇に掲げられた国文研の道統に連なる方々の御遺影であり、また神主によつて読み上げられる多くのお名前を聞き、その伝統の重みと緊張感に身が引き締まる思ひがした。

しかし、合宿においても慰霊祭においても、会員方々の口から発せられるのは、次世代の担ひ手である学生や若手の減少への嘆きや危機感であった。実際、合宿教室に参加する若い世代の少なさは誰の目にも明らかで、焦るのは当然であらう。

しかし、私は現状を深刻に受け止めつつも、このことに対し決して悲観はしてゐない。

恐らく、国難の正体が混沌とし解り難くなりつつある現代にこそ、国文研の価値が再認識されるべきと感じてゐる。軽薄な偏向報道を日々垂れ流して憚らない大手メディアらの

力が弱まり、新聞やテレビのみが情報源として主流であつたかつてに比べ、現在はそれらに安易に影響を受けないフェアな感覚力を持つ若者は以前より明らかに増える傾向にある。むしろインターネット等からの多角的な視点を得て、氾濫する情報から取捨選択する能力を持ち始めてゐる。昨今の政治経済の動静にも少しづつではあるが、今までは異なる潮流が見られる。そのやうな意識の高い若者への受け皿として、今こそ国文研の役割は大きいと信じてゐるのである。様々な形での情報発信ができれば良いのではと思つてゐる。

国文研の会員となつて約一年程度の私自身は、国文研について未だ詳しく識つてゐるとは言ひ難い。今は尊敬する諸先輩方の姿に惹かれ、その後ろについていつてゐるに過ぎないが、今年十月から、小田村寅二郎先生の御著『昭和史に刻むわれらが道統』をテキストとする中堅若手世代を対象とする勉強会が始まる。今後仕事の合間を見付け積極的に参加し、国文研の成り立ちについて一から学んでゆきたい。そして今後の会の発展に、自分の専門や経験を微力ではあるが生かしてゆきたいと強く願つてゐる次第である。(作曲家 桐朋学園大学講師・上野学園高校音楽科講師)

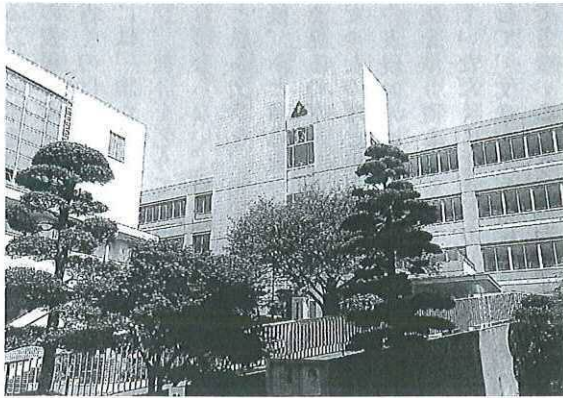
「南風競ふ」(上)

—新しい校舎の窓から—

名和長泰

筑後川流域の眺望

本校(久留米大学附設高等学校)は昭和二十五年(一九五〇)に久留米市東部の久留米大学御井学舎に創立された。昭和四十四年(一九六九)に現在の校地へ新築移転。平成十七年(二〇〇五)三月二十日に福岡西方沖地震が発生し、校舎の耐震補強が建て替へか種々検討の結果、旧高校寮跡地も含め全面的な校舎建て替へになった。平成二十二年から足掛け三年を費や



して校舎を建設し、昨秋ようやく完成した。同じ敷地内の工事と隣り合はせて、中高一千余名の学校を通常通り稼働させながらの建設や移転は何かと大変であった。

新校舎は五階建てで、東棟に高校、西棟に中学の教室が各学年一フロアに配置され、やうやく「四十人学級」が実現できた。中央部には保健室、二階分の図書館、職員室、合同講義室、美術室、L.L教室、音楽室が整備されてゐる。校地がや、高台にあるため、筑後川流域を広々と眺望できる。遠景には東の方から、古く山伏の修験道場であった英彦山(二二〇〇米)、大宰府政庁の鬼門(北東)の方位とされた宝満山(八三〇米)、天智天皇二年(六六二)白村江の戦ひを機に築かれた基肆城址がある基山(四〇五米)、古く山岳密教の修験場であった脊振山(一〇五五米)などの山々である。

旧制久留米医科大学となり、昭和二十五年(一九五〇)の学制改革により新制久留米大学が設置される。それと同年に本校は戦後のいはゆる新制高校の男子校として創立された。その際、校名を「久留米大学附設高等学校」としたのは当時の久留米大学初代学長小野寺直助先生(一八八三—一九六八)と本校初代校長板垣政参先生(一八八二—一九六七)お二人の關係が背景にある。

「附設」の由来

久留米大学の前身は昭和三年(一九二八)創立の九州医学専門学校である。昭和二十一年(一九四六)大学令によ

り旧制久留米医科大学となり、昭和二十五年(一九五〇)の学制改革により新制久留米大学が設置される。それと同年に本校は戦後のいはゆる新制高校の男子校として創立された。その際、校名を「久留米大学附設高等学校」としたのは当時の久留米大学初代学長小野寺直助先生(一八八三—一九六八)と本校初代校長板垣政参先生(一八八二—一九六七)お二人の關係が背景にある。

後掲の通り簡素ながら普遍的な教養がこめられてゐる。今日の生徒や若い保護者にとっては耳慣れない言葉もあり、初め古めかしく感じられるかも知れない。それでも卒業生に聞くと、卒業後、何かにつけ校歌に励まされたといふ卒業生は多い。附設は時代とともに中高一貫校、男女共学校と変遷してきたが、親しみをもって歌はれる校歌は創立当時のまゝであり、今後も当分変わらないだらう。

岡中学の御出身であり、ともに医師・医学者であり、ともに九州帝国大学医学部の同僚であられた。先に久留米大学学長となつてをられた小野寺先生が新設高校の初代校長に板垣先生を招くにあたり、先輩で元同僚でもあるので上下の従属關係を示す「附属」とするわけにいかず、「附設」といふ校名を選ばれたのである。現在も学校法人久留米大学に属するものの、「附属」校のやうな大学との従属關係はほとんどない。

- 一、高良山下の学園に
万朶の桜咲きそろひ
若き血潮の高鳴るを
見ずや希望の揺籃地
- 二、江月冴えて悠久の
流れは遠し千歳川
高き彼岸の光明を
見ずや試練の理想郷
- 三、修羅道の世を救ふべく
平和の偉業任として
築く不朽の真善美
見ずや我らの大使命

(語注)

千歳川 筑後川の古称。
修羅道 争ひの絶えない世。

創立にあたって旧制中学教育のよい面を継承せむといふ意識が働いてゐたことは容易に想像される。校歌の作詞は草創期に国語を教へてをられた大石亀次郎先生で、その歌詞は

まだ終戦後四年余りといふ時期で

あったから、草創期の職員・生徒の中には家族・親類・同僚・友人が戦災に遭ひ命を失ったものも少なくなく、国民みな戦後復興を希求してゐた。「平和の偉業」に貢献する「大使命」を自覚させる歌詞は誰にとつても極めて自然なものであったらう。

そして国民は努力を重ねて戦後復興を成し遂げ、さらに今日の繁栄を築き上げた。では、日本の現状は満足のいくものだらうか。「成熟社会」といふ言ひ方があるが、多くの国民は、わが国と国民の現状と将来には重い課題が山積し、前途はそれほど平坦ではないと感じてゐるのではないか。校歌を歌ひ、本校の原点と来し方を省みるたびに、また新しい気持ちで「我らの大使命」を自覚させられる。

久留米のシンボル「高良山」

校歌の歌詞は「高良山」から始まる。高良山(三三二米)は学校の東にあり、教室の内外から四六時中見える身近な山である。豊かな自然と歴史のある久留米のシンボルともいへる山で、久留米つ、じの咲くころには遠足で訪れたり、普段はクラブ活動で走って登ったりもする。

高良山に鎮座する筑後一の宮高良



大社の歴史は景行天皇十二年(八二二)まで遡る。筑後平野に突き出した地形は古代から戦略的要衝として重要で史跡も随所にある。山をとり囲む古代の神籠石はまだ分つてゐないことが多い。吉見嶽は天正十五年(一五八七)に島津征伐に向ふ豊臣秀吉が本陣を敷いた城跡である。高良山の頂上には、南北朝時代の筑後川合戦の際に、征西將軍宮懐良親王方の毘沙門岳城がおかれた。

数々の往時を偲ばせるもの

一方、校舎の北側の窓からは市街地の向ふに筑後川の流域の田畑の広がりが見える。この一帯は南北朝の頃、合戦の場となった。文和二年(一

三五三)には大宰府に迫る「針摺原の戦ひ」が現在の筑紫野市の中央部の平地で戦はれた。延文四年(一三五九)には筑後川北岸の十キロ四方で双方約十萬の將兵が死闘を繰り広げた。九州で最大の合戦で「大保原(大原合戦)または「筑後川の戦ひ」といはれる。

懐良親王率ある南朝方は菊池武光赤星武貫、宇都宮貞久、草野永幸ら約四萬、大宰府を本拠とする北朝・足利勢は少式頼尚、少式直資の父子、大友氏時、城井冬綱ら約六萬の壮絶な戦ひであった。

菊池氏らの奮戦を讃へて頼山陽(二七八一—一八三三)は「下筑後河過菊池正観公戦歎感而有作」といふ三十六句の長詩を詠んでゐる。その途中の二十一—三十句、

- 歸來河水笑洗刀
- 血迸奔湍噴紅雪
- 四世全節誰儔侶
- 九國逡巡西征府
- 棟蓼未肯向北風
- 殉國劍傳自乃父
- 嘗卻明使壯本朝
- 豈與恭獻同日語
- 丈夫要貴知順逆
- 少貳大友何狗鼠

(読み下し)

帰り来つて河水に笑つて刀を洗へば

血は奔湍に迸つて紅雪を噴く

四世の全節誰か儔侶せん

九國逡巡す西征府

棟蓼未だ肯て北風に向かはず

殉國の劍は乃父より伝ふ

嘗て明使を卻けて本朝を壯にす

豈恭獻と同日に語らんや

丈夫要するに順逆を知るを貴ぶ

少貳大友何の狗鼠ぞ

(語注)

四世：菊池武光公の父武時、武重、子の武政ら四代。儔侶：仲間。棟蓼：わうめの花の蓼。兄弟(の情の美しいこと)。嘗却明使：正平二十三年(一三六八)明国の使者が博多に来た時その無礼を怒つて追ひ返した。恭獻：足利義満が明に臣礼をとり、没後恭獻王の諡号を受けた。

菊池氏らの奮戦により九州全域は征西府の支配が実現する。

今日も筑後川の北岸(往時は南岸)に「宮ノ陣」といふ地名がある。菊池武光が太刀を洗つた故事が地名となり、太刀洗公園には立派な銅像もある。さらに敵味方なく戦没者を供養する大原合戦五万騎塚、など往時を偲ばせるものが数多い。

(久留米大学附設中学校教頭)